

「稲むらの火」 —バンダアチェにおける防災教育支援活動—

濱田政則 Masanori HAMADA
フェロー 工博 早稲田大学理工学部
国崎信江 Nobue KUNIZAKI
危機管理教育アドバイザー

清野純史 Junji KIYONO
正会員 工博 京都大学工学研究科
鈴木智治 Tomoji SUZUKI
飛鳥建設(株) インドネシア事務所

稲むらの火

読者の皆さんは「稲むらの火」という物語をご存知でしょうか。

1854年の南海地震の際に、紀州・浪速廣村(現・和歌山県広川町)に住む浜口梧楼(漢兵衛)が稲藁(いねむら)を燃やして村民を高台に導き、村民の命を津波から守ったという実話に基づいた物語である。

1937年(昭和12年)から1947年(昭和22年)にかけて小学校の国語読本に掲載され¹⁾、数多くの小学生に感動を与えると同時に、地震・津波の怖さやその備えに対する深い印象を与えた。原作はラフカディオ・ハーン(1897)の中の「A Living God(生ける神)」の章に書かれた文章で、これを中井常雄が児童用にわかりやすくまとめて文部省の教材公募に応募し、それが国定教科書の教材として採用されたものである²⁾。

物語は、海沿いの高台に住んでいる庄屋の五兵衛が地鳴りとそれに続く長いゆったりとした揺れから不知機な不安を感じ、海水が沖へ沖へと引いていく状況から津波の来襲を確認する所から始まる。村人は皆、豊年を祝う祭りの支度中で誰も地震には気づかない。村人が大津波に飲まれてしまうことを恐れた五兵衛は一計を案じ、大事な稲藁に火

をつけ(図-1)村人の注意を引き付ける。

村人は、庄屋の家が火事だと思い、早鐘でそれを村中に知らせながら、手に手に水を持ち山の平へ駆け上っていき、五兵衛は、すぐ火を消しにかかろうとする村人を制止しながら、全員が高台に避難するのを確認する。その後、大津波が村を襲い、村は崩壊もなく消え去っていく。我が帰った村人は、そこで初めて、庄屋の五兵衛がつけた稲藁の火によって自分たちの命が助かったことに気づく……という内容である。

スマトラ島沖地震

2004年12月26日に起こったこのスマトラ島沖地震(M_w=9.0)は、その揺れの大きさもさることながら、インド洋を囲む島嶼国々に甚大な津波の被害を与えた。インドネシアは、死者・行方不明者合わせて164,000人という未曾有の人的被害を被り³⁾、特にスマトラ島の北部に位置するアチェ州の州都バンダアチェ市では、その人口約22万人のうちの4万人、5人に1人の割合で亡くなったといわれている。2005年3月23日にはスマトラ沖で再度M_w7.7の大規模な地震が起り、ニアス島をはじめとした各地で、大きな人的・物的被害が生じている(図-2)。



図-1 稲むらに火をつける五兵衛(学研ビデオより¹⁾)

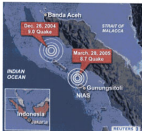


図-2 インドネシアで起きた2つの大きな地震 (Reuters³⁾)



Ahhi Gempa!

図3 小学生用の教材として使用した絵本（学研提供）



図4 小学生用の教材として使用した紙芝居（学研提供）

防災教育の必要性と教材

(社)土木学会は、2005年4月11日から17日にかけて巨大地震災害対応特別委員会委員長の濱田政博・早稲田大学教授をリーダーとする4名の防災教育支援チームを編成、バンダアチェ市へ派遣した。これは、この防災教育支援チームに先立って派遣された(社)土木学会・スマトラ島沖地震被害調査団の活動の一環として行われた特別授業から、特に現地若年層の防災教育の必要性が強く認識されたからである。このため、巨大地震災害対応特別委員会の防災教育部会主催を務める筑野純史・京都大学助教授、同部会委員の国崎信江・危機管理教育アドバイザー、そしてインドネシアに20年以上在任し、現地のコーディネーターと通訳を一手に担当する鈴木智治・福島建設(株)インドネシア事務所副代表 NO の OSCA-International インドネシア事務局長の4名から成るチームが編成された。

小・中・高校生を対象とするため、それぞれの年齢層に合った教材を準備しなければならぬ。全てに共通の教材として、学研研究社からご提供いただいた前述の「福むらの火」のビデオ(約15分)、小学生を対象とした絵本(図-3)や紙芝居(図-4)、そして中学・高校生を対象に地震や津波

の発生メカニズムをわかりやすくアニメ化した教材(図-5、図-6)を、インドネシア語の訳とともに持参した。絵本・紙芝居はともに学研研究社から出版されているもので、絵本は巨大地震災害対応特別委員会の権利関係、また紙芝居は国崎女士の原作である。中学・高校生用の教材の多くは、三浦明紀・山口大学教授および藤本浩一・山口大学の教授が長年に亘って作成してきた地震防災アニメなどを快くご提供くださったものを使用した。また、アイダン・オメル・東海大学教授にも教材をご提供いただいた。さらに、訪問先の学校のほとんどが、津波のために教育機材が使えない状態になっているということで、(社)土木学会は福島建設(株)の協力を得て、1校に1台のパソコンを寄贈した。

バンダアチェにおける防災教育支援活動

4月13日の午後から16日の午後にかけて、バンダアチェ市内の社会福祉施設(図-7)で、小・中・高校、そして短大の計9校を訪問した。

13日夕方に訪問した社会福祉施設(福野町)では、小学生から高校生まで約100人を対象に福むらの火を見せ、絵本を説明し、紙芝居を生徒自身に読ませ、防災ソングを歌っ

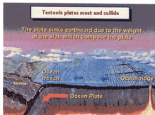


図5 中・高校生用の教材の一例 (龍本氏提供)

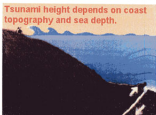


図6 中・高校生用の教材の一例 (龍本氏提供)



写真-1 社会福祉施設での授業風景
(小学生から高校生まで約100名)



写真-2 授業後の記念撮影



写真-3 国立第3高校での授業風景 (約200名)



写真-4 授業後に熱心に質問に来る女子生徒 (国立第3高校)



写真-5 講堂に集まった国立カルティカ第19小学校
(約400名)



写真-6 津田について質問する生徒
(国立第2中学校：約200名)

て防災教育を行った(写真-1、写真-2)。翌14日に訪れた国立第3高校では、優秀なクラスを対象に英語で講義を行った。火山噴火と地震の復原、津波と地震の時間差など、専門的な質問が多く出された(写真-3、写真-4)。その後、約400名の児童がピアノや絵本に夢中になった国立カルティカ第19小学校(写真-5)、数部脱走も技さの教室に集まった

約300名の生徒が、福むらの大や高学年用教材を学んだ国立第1中学校、と訪問を続けた。15日は国立第2中学校(写真-6)を訪れた後、アチェフナの海岸沿いから内陸に移り不自由なアトでの高校生活を強いられている国立第1ブカンバダ高校を訪ねた。この高校では、われわれの到着を待って心からの踊り(写真-7)や、彼らの心の叫びとも言



写真-7 歓迎の旗手を披露してくれる国立第1プカンバダ高校の生徒（約700名）



写真-8 熱いテントの中でも熱心に授業に聞き入る生徒たち（国立第1プカンバダ高校）



写真-9 紅芝居を食い入るように見つめる児童（国立第1小学校：約1,000名）



写真-10 国立保健・衛生ポリテク校の学生（約200名）

える地震の劇を披露してくれた。その後の授業は、うだるような暑さのテントの中で行われたが、必死に知識を吸収しようとする姿勢には頭が下がる思いであった（写真-8）。16日の国立第1小学校では、児童の歌で出迎えを受けた。津波で親を亡くした児童が涙ながらに自分の体験談を語る際には言葉が失った。1,000人を超える児童が、国崎女史の防災ソングを聞き、自分たちの言葉で歌い、そして紅芝居に食い入るように見入っていた（写真-9）。国立保健・衛生ポリテク校では、将来子供たちと接する機会が多い女子学生を中心に講義を行い、箱むらの火と防災ソングを披露した（写真-10）。最後に、国立第11高校を訪問し、約150名の生徒を対象に総仕上げとしての防災教育を行った。

現在、UNICEFやOSCAなど、国連やNPOとの協働による防災教育推進の話し進めており、今後も対象地域を拡大しながら支援活動を継続的に継続してゆくつもりである。

今回、われわれの授業を受けてくれた児童・生徒は3,000人以上にも及んだが、パンダアチェ市全体から見れば微々たる数であろう。しかし、何十年、あるいは何何十年先に、この子供たち、あるいはさらにその子供たちから第2、第3の五兵衛が出てくればこれ以上の喜びはない。

大津波で家族全てを亡くし、孤児院で生活を送っている少女が言った言葉が、残虐のように今も心に重く残っている。この言葉は忘れてはいけない、と思う。

「日本では、200年も前にこのような悲惨な経験をしてはいるのに、その経験をなぜもっと早く私たちに伝えてくれなかったのですか？」

講師：研究のための貴重な時間を割いてインドネシア語への翻訳をお手伝いいただいた京都大学工学研究科博士後期課程修了のDr. M. H. Pradees氏に感謝の意を表します。

参考文献

- ① 「箱むらの火」研究会：箱むらの火ホームページ、<http://www.inamuranohi.jp/index.html/>。
- ② 防災システム研究所：箱むらの火、<http://www.bousai-on.jp/inamuranohi.htm>。
- ③ 学習研究社：ビデオ教材「箱むらの火」。
- ④ C. Southton and Y. Ono: 26 December 2004 Indian Ocean Tsunami, Survey of Malicious Impacts in Sri Lanka and Aceh, April 2005.
- ⑤ ロイター通信社：<http://www.centers.nj.gov>。